
潮風の街

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潮風の街

【Nコード】

N2098C

【作者名】

りす君

【あらすじ】

今年、大学受験を控えてるこの小説の主人公、高校3年の最上誠。彼の周りにいる人達は、個性豊かな面々。彼が高3に進級した春のある日、突然彼のクラスに美人三姉妹が転入してきたから、さあ大変！今、彼の一年間が面白おかしく狂い始めた！

b r e e z e 1 .. 青年よ、幸運を抱け！（前書き）

この小説のジャンル：一応、恋愛ですが学園か、コメディーか全く判断つかない作品です。
では、どうぞ。

b r e e z e 1 .. 青年よ、幸運を抱け！

(チャリンチャリン！)

青年..

「うおー、遅刻だあ！」

俺は、愛車であるマウンテンバイクで朝っぱらから日本海沿いの国道を激走していた。その理由は、昨日の夜まで^{さかのぼ}遡る事となる。

(回想)

青年の父親..

「今から父ちゃん、飲んでくるから帰りが遅くなる。」

青年..

「くれぐれも飲みすぎるなよ、親父。」

青年の父親..

「ああ、分かってるよ。それじゃな留守番頼んだぞ、誠。」

青年..

「ああ、行つてらっしゃい。」

その晩、飲みに行った親父が帰って来なかった。

やっと帰ってきたのが、何と深夜の三時過ぎ。それから泥酔した親父に俺は叩き起こされ、五時まで愚痴やらなんやかんやを延々と聞かされた。

その後ようやく親父が寝て、俺は少しでも睡眠を採ろうと布団に入ったのが間違이었다。

青年の父親..

「……い、…こと。」

青年..

「う、うう…ん？」

青年の父親..

「おい、誠。」

目が覚めると、寢床に親父が座っていた。

青年..

「何だ、親父。」

青年の父親..

「お前、今日は学校休みなのか？」

青年..

「いや…ある。って、親父っ！今、何時？！」

青年の父親..

「ほれっ。」

親父に目覚まし時計を渡され、現在時刻を見た俺は青ざめた。

目覚まし時計..

（8時30分）

青年..

「っ?!」

民家の中から..

「なあー！ー！ー！ー！」

（回想終了）

結局、俺は親父の所為で遅刻するハメになってしまった。

（学校法人 津端一つはし一学園

新潟県私立 盛山一もりやま一高等学校正門）

青年..

「ぬおー！ー！！！」

俺は、降りずに自転車置き場まで全速力で漕ぎまくって勢いあまって自転車置き場に停めてあった無数の自転車に突っ込んでクラッシュした。

（ガシャーン！！）

凄まじい音が校内に響き渡り、俺はあっさり生徒指導の先生に捕まってしまった。

（生徒指導室）

先生A..

「またか、最上^{もがみ}。懲りない奴だな。」

青年..

「いや、あれはちょっと…急いでたもんで…アハハ。」

先生B..

「はあ…全く。お前には、溜め息しか出んぞ。」

青年..

「…済みません。」

先生A..

「君の名前は三年八組、最上^{もがみ} 誠^{まこと}で合ってるよな？で、年齢が18

歳。O型。身長は175cm、体重65kg。趣味は…。」

誠..

「…もう良いです。」

先生C..

「先日は、校内でサッカーして硝子数十枚を割ってここに連行されて来たよな?」

誠..

「はい。」

先生A..

「そしてその前は、科学室で授業中に実験してた所、誤ってボヤを発生させて連行。そしてその前の時には、美術の時間に彫刻刀を振り回して連行…君の行動には呆れて物も言えませんか。」

誠..

「…済みません。」

結局、俺は反省文を原稿用紙3枚に書いて提出した。

誠..

「ああー、朝から疲れた。」

俺が生徒指導室から抜け出せたのは、3時間目終了の時刻だった。俺のクラスは六階にあり、建物上の関係で他の学校には滅多に見られないエレベーターが各階に設置されている。

(チーン)

ドアが開いて、俺はエレベーターから各教室まで続く廊下を歩いた。

(クラス表記…3-8)

(ガラガラ…)

誠..

「おはよう。」

俺は、抑揚の無い声で挨拶した。

誠の友達と見られる男子..

「うおっ！お騒がせ野郎の誠の登場だ！」

誠..

「おいおい..それ禁句だろ祐司？」

片岡^{かたおか} 祐司^{ゆうじ}。俺の幼馴染みで、無二の親友である。

片岡..

「それよりも聞いてくれよ、誠！」

誠..

「..何だよ。話は出来るだけ短めにな。」

俺がそう言っていると、祐司はムスツという顔をしたが順に話し始めた。

片岡..

「実はな今日このクラスに一人、他の高校から転入してきたんだ。」

誠..

「で、そいつが女だからヤッホーっていう話か？」

どうやら図星だったようで、祐司は舌打ちをした。

誠..

「ったく..そんな事かよ。」

俺が溜め息をつくとき、祐司が畳み掛けるように言ってきた。

片岡..

「でもさでもさ！そいつ…ホントは。」

誠..

「解ったから、落ち着けて。…よっこらせっと。」

俺は自分の席に座った…つもりだった。

次の瞬間、俺は目と耳を疑った。

女子の声..

「あの！そこ、私の席なんだけど！どいてくれないっ！」

誠..

「えっ?!」

他の女子の声..

「千海、少し強く言い過ぎじゃない？」

誠..

「っ!!」

もう一人の女子..

「…ち…千海…おっ…お姉ちゃあん、言葉を…も、もっと優しくした…方が…良いよ。」

誠..

「っ!!!!」

俺が、何故驚いたか？

目の前に同じ人が三人もいるのだから、そりゃ誰だって驚く。

片岡..

「綾瀬三姉妹、コイツすまないね。許してやってよ！」
誠..

「…アヤセ…三姉妹？」

気の強い女子..

「ま、仕方ないか。ちなみに：アンタ！」

誠..

「な、何だよ..。」

気の強い女子..

「アンタの席は、一番後ろの窓側の席になったから。」

誠..

「えっ?! てか、一体誰だよアンタ達は？」

俺は、全く知らない奴に怒られてキレたが、祐司が必死に止めてくれた。

一番気の弱い女子..

「：た：多分、最上君は：まだ：わ：私たち：の事を：し：知らない：んだよ：きつと。」

片岡..

「俺が紹介するよ。この人達は、今日転校してきた綾瀬三姉妹。右から上順で、綾瀬 千海^{ちうみ}さん、綾瀬 湊^{みなと}さん、綾瀬 まりんさん。上の二人は双子で、まりんさんが遅れて誕生したけど同学年なんだ。」

千海..

「宜しく。」

湊..

「宜しくね。」

まりん..

「よ：宜しく：ね、最上君。」

片岡..

「んで、コイツは最上^{もがみ} 誠^{まこと}。馬鹿で、運動神経ゼロの取り柄無し

男。」

誠..

「おい、その言い方はねえだろ！」

すると、三姉妹の長女の千海が俺の顔をまじまじと眺めてきた。

誠..

「な、何だよ..。」

千海..

「最上 誠ね..サイジヨウで良いよな？」

誠..

「ふざけるな！ “モガミ” だ！ 漢字ではサイジヨウって読むが、俺は“モガミ” だ！」

まりん..

「ち..千海お姉ちゃん..。も..最上君に..あ..謝ろうよお..。」

千海..

「嫌だ。サイジヨウ、早く席に戻れ。」

誠..

「っ！..！」

俺は、カチンときて綾瀬 千海に殴り掛った。

まりん..

「あ..危ないっ..！」

（バキッ..ドゴッ）

誠..

「..ぐっ?..！」

まりん..

「..もっ..最上君っ！」

いつの間にか、俺は激痛と共に床に倒れていた。

湊..

「はぁ…。あのね、最上君。」

誠..

「な…何？」

湊..

「私と千海は、幼少の頃から護身の為に武道を親にやらされてるの。」

「

誠..

「ぶ…どう？」

湊..

「空手、柔道、テコンドー、剣道、キックボクシング…などかな。」

千海..

「雑魚は大人しく、席に戻りな。」

誠..

「……………」

千海..

「ああ、疲れた。二人共、喉渴いたから自販機に飲みモン買い行こつ。」

湊..

「千海、やり過ぎだから。」

まりん..

「…う、うん。」

こうして、俺と悪魔の綾瀬三姉妹との出会いは最悪だった。

数分後、俺が未だに痛みで動けずにいると、三姉妹の末っ子、まりんが一人教室に帰ってきて俺に駆け寄ってきた。

まりん..

「...もっ、最上君?」

誠..

「...えっ、何?」

まりん..

「さっ、さっきは...ゴメン...ね。」

彼女の目には、うつすらと涙が。

誠..

「えっ? ええっ!! いきなり、泣かないでよ!」

まりん..

「うっく... ひっく... ゴメン... 口元から血が出てるから、これ...使って?」

彼女が手に持っていたのは、水色のハンカチだった。

誠..

「...良いよ、悪い気がするから。」

まりん..

「...で、でも...ダメっ! 最上君... ちゃ、ちゃんと手当しよっ!」

誠..

「.....。」

さっきの言葉、訂正。

三姉妹の中に一人、優しい天使がいた。

b r e e z e 2 .. 放置しても駄目、過保護も駄目。

今年、高3になった俺達には来月の5月に修学旅行が計画されている。行き先は、東京と横浜。新潟と比べものにならない程、都会らしい。

そして今、俺達は修学旅行の班決めをしていたのだが…その結果。

千海..

「うっわ、最悪！　なんで、寄りによってサイジヨウ達と一緒になのよ！」

誠..

「知らねえよ！　てか、嫌なら他んとこの班に混ざれ！　あと、何度も言うが俺はサイジヨウじゃなくてモガミ（最上）だっ！」

千海..

「ガタガタ言ってるじゃないわよ！　あー、憂鬱。　せっかくの修学旅行の楽しみが半減するし！」

誠..

「黙れ、カマトト女！　こっちだって、せっかくの修学旅行がテーマのおかげでクソ旅行になりそうだ！」

綾瀬三姉妹が転校しに来てから、半月が経った。　だが、相変わらず長女のクソ女は自己中心的で更に暴力的なので、クラスでは浮いた存在である。

次女の湊は、様々な環境に適応力を持っているのか、わずか半月でクラスメートの半数と仲良く出来ている。

三女のまりんは、長女とは違う形で孤立している。　次女の湊曰わく、彼女は普段から大人しく、極度の人見知りで、人とのコミュニケーションが上手く取れないらしい。更に環境が変わった事によって、生活にまだ慣れていない…との事。

なので、班のどこにも入っていなかった彼女を俺らの班が入れたのだが、そこに要らないオジャママムシがついてきてしまったのだ。

誠の心の声..

（てか、このクラスの女子から敬遠されるとは、相当嫌われてるんだな。）

担任教師 本村..

「はい、じゃあ班も決まった事だし、終わりにするか。これ以上、班について苦情等は一切受けつけないからな。はい、解散！」

俺らの担任教師、本村は中年のブ男。眼鏡を掛けていて、体系もメタボ。女子には丸っこいのでマルちゃんと呼ばれている。事なかれ主義らしく、一度決めた事は二度と覆さない様で校内では迷惑人として有名。勿論、ブーイングも無視する。それでも、妻子持ちらしい。

誠..

「さてと、帰るとするか。」

ゆるゆるのホームルームも終わり、家路につこうとしたその時..、

???..

「あ、あの..。」

誠..

「うん？」

不意に声を掛けられ、後ろを振り向くと綾瀬三姉妹の三女、まりんがいた。

誠..

「なんだよ？」

まりん..

「えっと…、その…あの…。」

俺は、しどろもどろな三女にイライラしてきた。

誠..

「用がねえなら、帰るぞ。」

待つのが面倒くさくなり、俺は鞆を持って帰ろうとした。

まりん..

「あのっ！ わ、私を案内してくれませんかっ！」

誠..

「…どこに？」

まりん..

「えっと…、この学校内を。 転校して来たばかりだから…。」

誠..

「えー、面倒くさいな。他の奴に頼みな。」

まりん..

「そ…そんな…。」

三女は今にも泣きそうな顔をしている。 ここで泣かれると、俺のお株が下がってしまう。

誠..

「わっ、わかったから泣くな！ 頼むから。」

まりん..

「ぐずっ…あ、ありがとう、最上君。」

という訳で、放課後特に何も無かった俺は学内を案内する事になっ

た。

(318教室内)

千海..

「あれっ、そういえばまりんは？」

湊..

「さっき、最上君と一緒に教室から出て行ったけど..。」

千海..

「えっ、あのクソサイジヨウと!?! 凄く危ないじゃん、あんなゲテモノと二人つきりじゃ! 私、ちょっと行ってくる!」

(ダッ!!)

湊..

「ちよっ、ちよっと千海っ!?! はあ..全く、しょうがないんだから。」

(2階廊下)

誠..

「ここが職員室で、向こうが図書室だ。で、一階には学食(学生食堂)と購買部がある。学内案内はこれぐらいで良いか？」

まりん..

「え、えっと..あと..。」

誠..

「なんだよ?。」

まりん..

「お..屋上、行きたいな..。」

誠..

「屋上？」

まりん..

「だ、ダメ…かな？」

誠..

「まったく…わかったよ。」

まりん..

「あ、ありがとう…最上君。」

誠..

「べ…別に礼なんか。」

案内している最中、幾度も見せる彼女の自然な笑顔が可愛く感じた。

誠..

「さっ、行くぞ。」

まりん..

「あっ…、うん!!」

俺達は、職員室の脇にある階段を使って屋上へ向かった。屋上へは、エレベーターが通じていないのだ。俺達が4階に差し掛かったその時…、

千海..

「あー、見つけたっ!!」

綾瀬三姉妹の長女、クソ女に会ってしまった。

千海..

「まりんっ、このゲテモノに何かされなかった？ 大丈夫？」
まりん..

「う、うん、大丈夫だよ…千海お姉ちゃん。」

千海..

「このクソゲテモノっ!! よくも、私の妹をつ!!」

誠..

「待て、誤解だっ!! 俺は、何も..。」

千海..

「問答無用!」

そう言って長女は、顔面へ殴りかかってきた。

誠..

「うわっ、マジで誤解なんだよ!!」

千海..

「ふざけるな、許さん!!」

(ブンッ)

階段の踊場で必死にパンチを回避する俺。回避するのが精一杯で、抵抗出来なかった。てか、抵抗しようとして手を出したら、普通に俺が一方的に悪者である。女に手を出す事は、良ろしくない。

千海..

「フンッ、テヤッ、回避すんなっ!!」

誠..

「嫌だっ、そんなの喰らいたくねえよっ!!」

千海..

「ふざけんなっ、人の妹を勝手に連れ出しって変な事されちゃ、姉として黙っておけないんだからっ!!」

誠..

「本当に何もねえんだってっ! うわっ?!」

回避するのに必死で、後ろが壁があるのに気がつけなかった。俺は、四隅に追い詰められた。これぞ、袋のネズミなのか。

千海..

「ふう…やっと追い詰めたわ。さてと、ボディーに一発ブチかますか。手加減無し、オリヤー!!」

誠..

「くっ!!」

かわすのが困難だと分かり、俺は目を瞑り、齒を食いしばった。俺のミゾオチに拳が飛んできたその時…、

まりん..

「やめてえー!!!! 千海お姉ちゃんっ!!!!」

三女の悲鳴にもとれる絶叫が、その場に轟いた。連絡階段特有の音の跳ね返りで、三女の絶叫は上にも下にも響いた。その絶叫を聴いた長女の拳は俺のミゾオチ数センチ前でピタッと止まった。俺は、情けない様でヘロヘロとゆっくりへたり込んだ。

まりん..

「最上君は、私に学内を案内してくれたのっ! それを頼んだのは、私なのっ!」

千海..

「嘘よ、まりんがこのケダモノに頼む訳ないじゃないっ!!」
誠..

「ほ…ホント、マジ!! ソイツが俺に案内してくれて頼んできたんだよっ!!」
まりん..

「だから信じて、千海お姉ちゃん。彼は、本当に何もしてないの。最上君は、すごく優しい人なの。」

千海..

「...本当に手を出してないでしょうね？」

誠..

「だから、そうだって言ってるじゃねえか...。」

千海..

「解った、今回の事は許す。」

誠..

「ふう...。」

千海..

「だが、次に私の妹に手を出したら本気でアンタを再起不能まで痛みつけるから。」

まりん..

「いい加減にして、千海お姉ちゃんっ！」

千海..

「うるさい！ これでも、まりんの事を守ってあげてるの！」

まりん..

「いつまでも、過保護にしないでよっ！ 私だって、もう17なんだから。」

千海..

「まりんを守ってあげられるのは、私と湊だけなんだから！ この分からず屋！」

まりん..

「千海お姉ちゃんこそ、分からず屋よっ！ もう良い！ 行こっ、最上君。」

誠..

「...えっ？ う、うわっ!？」

三女は、俺の手を掴むと長女から逃げるように階段を駆け上がった。

千海..

「あつ、待ちなさい!! : : ったく、生意気なんだから。」

(屋上)

まりん..

「さっきは、本当にゴメンね。 ケガは無かった?」

誠..

「大丈夫だ。 : : けど、お前こそ大丈夫かよ? 実の姉にあんな事を言ってしまったてさ。」

まりん..

「大丈夫だよ。 : : いつか、言おうと思ってた事だったから。 あのね、少し長いお話なんだけど : : 聞いてくれるかな、最上君?」

誠..

「何だよ?」

まりん..

「私ね、小さい頃から上のお姉ちゃん達に守られながら生活してきたの。 と言うのも、小さい頃の私は体が弱くて今のように引っ込み思案だったから、両親も私が学校とかでいじめられると心配してた。 だけど、私の二人のお姉ちゃんがいいつも私を見守ってくれて、今まで私は普通に学校生活を送れたの。」

だけど、それが徐々にエスカレートしてきて、普通に私が人とお話をする時でも、お姉ちゃん達は私を監視するようになって、特に千海お姉ちゃんとは私が男の子と話す事を毛嫌いして、その男の子をケダモノ扱いにしてさっきのようにするの。 だから、私の周りから人がいなくなった。 友達も出来なくなった。 私だって、友達欲しいし、他の女の子達みたいに男の子と恋愛してみたい。 いつまでも、私はお姉ちゃん達の言いなりにはなりたくないの。 : : その不満が爆発しちゃっただけなの。」

誠..

「過保護ね…。てか、アイツはお前に悪いムシがついて欲しくないからお前を守ってんじゃないかな。」

まりん..

「だ、だけど、それでもひど過ぎるよ。それに、四六時中監視されてると落ち着かないし疲れちゃう。」

誠..

「まっ、とにかく俺には関係無いし。帰るかな。」

まりん..

「…最上君、サイテー。」

三女は、頬を膨らませて不満顔をしたが、すぐに笑顔になった。

誠..

「じゃあな、お先に。」

まりん..

「…ちよっ、ちよっと待ってよお。も、最上君…わ、私と一緒に

…かつ、帰ろう？」

誠..

「えー、またアイツに襲われるのは嫌だし。てか、アイツというも帰ってるじゃないか。」

まりん..

「…うん。だけど…、今日はちよっとお姉ちゃんに謀反しようかな。」

誠..

「…戦国時代かよ。」

まりん..

「エヘッ。」

誠..

「さあ、帰るぞ。」

まりん…

「うんっ。」

今日は、いつも大人しく控え目な三女の意外な一面が解った。更に、長女があんな乱暴者になった理由も解った。だが、あのトラブルメーカーはこれでは終わらなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2098c/>

潮風の街

2010年10月12日01時41分発行